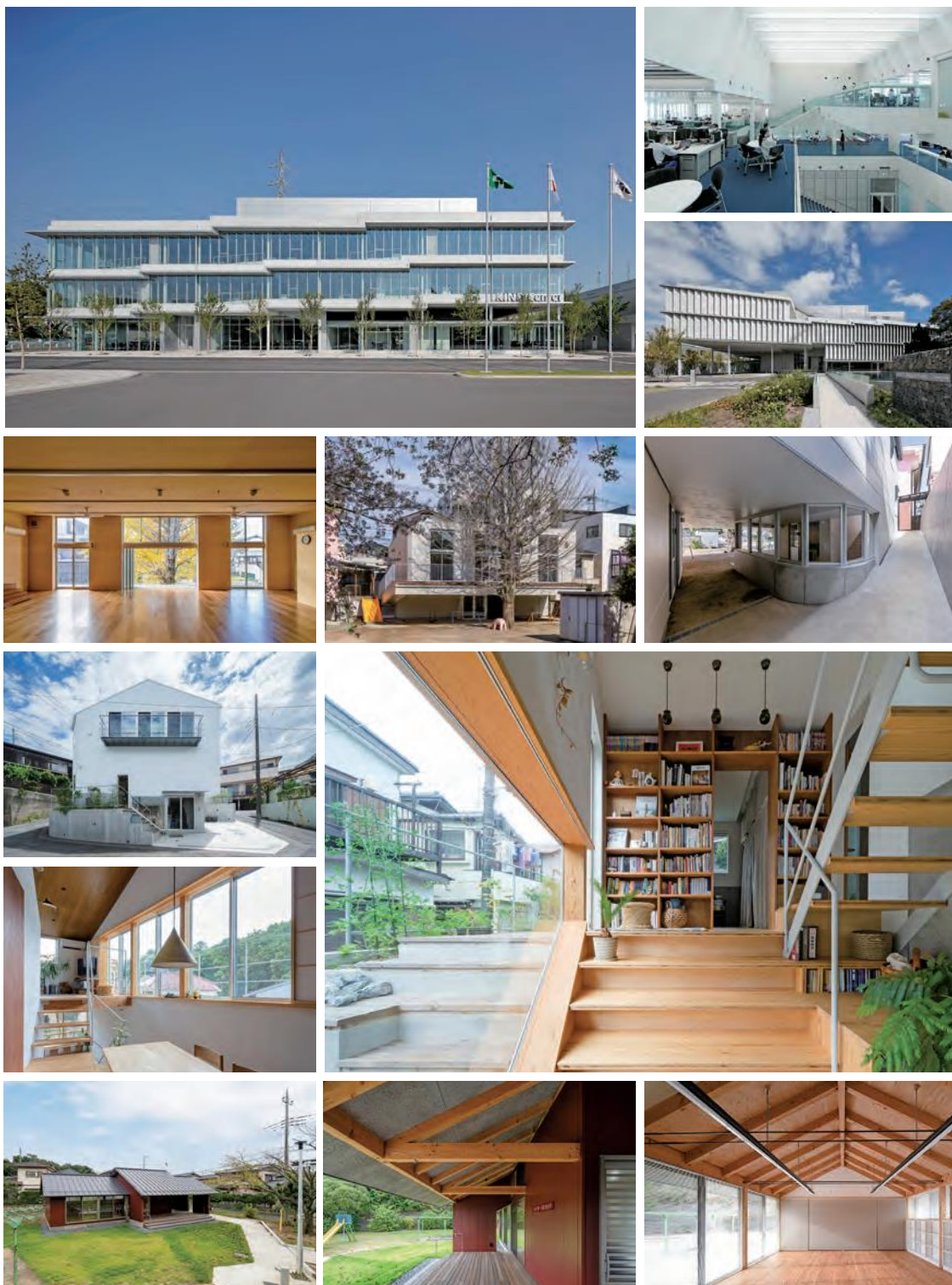


第31回(令和6年度) 千葉県建築文化賞 表彰作品集



主催：  千葉県

共催：  一般社団法人 千葉県建築士会

千葉県建築文化賞について



千葉県知事 熊谷 俊人

令和6年度の千葉県建築文化賞に多くの皆様から御応募をいただき、誠にありがとうございました。

千葉県建築文化賞は、建築文化や居住環境に対する県民の意識の高揚と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的に平成6年度に創設されました。

第31回となる今年度は、56点もの御応募をいただきました。

その結果、千葉県建築文化賞検討会議による検討内容を踏まえ、最優秀賞2点、優秀賞2点及び入賞5点の合計9点を選定したところです。

受賞作品は、新築の建物から既存ストックを有効活用したもので多岐にわたっており、人々の暮らしや柔軟な環境が提供されたもの、周辺環境との調和を生むもの、歴史的な景観を継承するものなど、いずれも千葉の魅力を高め、地域の活性化に貢献する素晴らしい作品ばかりです。これらの建築物が、地域社会の中で親しまれ、本県の建築文化の向上と、より良いまちづくりの推進に寄与していくことを心から期待しています。

今後とも県では、社会環境の変化等に対応し、県民の命と暮らしを守るとともに、恵まれた自然環境や優れた都市機能を持つ千葉で、全ての県民が生きる価値、働く価値を感じられる「千葉の未来」を創造していくため、全力で取り組んでまいりますので、引き続き御理解と御協力をお願いいたします。

結びに、受賞者並びに御応募いただいた皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げまして、あいさついたします。

令和7年3月

目 次

千葉県建築文化賞について	1	Bring up みどり子ども発達センター	7
第31回千葉県建築文化賞選考経過と総評	2	ROVEN OTAKIMACHI	8
KIND Center	3	都市の通庭	8
さうさうのいえ	4	部分断熱の家	9
やきりっこホール	5	選考の基準	9
大木戸第一公園集会所	6	第31回千葉県建築文化賞検討会議	9
児童養護施設房総双葉学園 小規模グループホーム	7	千葉県建築文化賞の実績(応募総数・受賞作品数)一覧	10
		受賞作品の位置	10

第31回千葉県建築文化賞選考経過と総評

応募56点から9点を表彰



千葉県建築文化賞検討会議委員長 岡部 明子

(選考経過)

第31回千葉県建築文化賞は令和6年5月の検討会議で募集要項を定め、7月上旬から9月下旬まで応募・推薦を受け付け、総数56点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)

例年に比べて応募数の少なめの回ではあったが、魅力的な作品が多かった。応募していただいた皆さまの熱意に深く感謝したい。

一次選考はすべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真等をもとに投票を行い、一般建築物7点、住宅5点を選んだ。次いで11月の3日間かけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。二次選考は12月開催の検討会議で、現地調査の報告を踏まえて再度投票を行い、討議を重ねながら優秀な建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある応募作品については、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、最優秀賞2点、優秀賞2点、入賞5点を表彰候補作品として決定した。

募集部門	選考経過	応募総数	現地調査 (一次選考)	受賞作品選定(二次選考)		
				最優秀賞	優秀賞	入賞
一般建築物		32	7	1	2	3
住宅		24	5	1	0	2
合計		56	12	2	2	5

(総評)

今年度は比較的小規模な福祉施設の応募が複数あり、地域共生社会の動きに応答する物的環境の変化を感じさせられた。また、さまざまな制約の厳しい条件下、創意工夫に秀でた小作品と、恵まれた条件で質の高い建築物を実現した作品を前に、どのような建築行為が、建築への県民の意識を高め、建築物で構成されるよりよい環境の提供に寄与するのかをめぐって議論が白熱した。

最優秀賞の「KIND Center」は、AGC千葉工場群の入口に建つ執務・会議機能を集約した建物で、偶発的な交流を促し、人びとの創発を引き出すことをねらって、スキップフロアで内部全体を連続させ、一体的な空間を実現させている。千葉県海岸の工場地帯と市街地は、広幅員の道路と緑地帯によって二重に分断されているが、そこにカラフルな室内が垣間見られる本建物が顔を出しており、変貌しつつある工場地帯と市街地の新たな関係を予見させるところが本賞にふさわしいと判断された。

これとは次元の異なる観点から評価されたのが、優秀賞の「やきりっこホール」である。1960年開園以来、部分建替えや増改築を重ね地域に親しまれてきた幼稚園の遊戯室新設である。限られた敷地において、地域のランドマークとなってきたイチヨウの大木をなんとしても守り、それとまるで抱擁するようなデザインである。本園に緑のある設計者と経営者の共同作業で、園児はもとより地域の人たちを複数世代にわたり建築とともに育むプロセスが秀逸である。

優秀賞の「大木戸第一公園集会所」は、自治会館の建て替えに際し都市公園内に場所を移し集会所として建てたものであり、高齢化の進む東京圏の郊外で地域活動の拠点の新たなかたちを示したといえる。自治会の人たちとともに実現させたことで、自治会の自主活動でみごとに運営されており、公園の利用の幅も広がっている。

入賞の「児童養護施設房総双葉学園小規模グループホーム」は、家族と生活することが難しくなった子どもたちが少人数で共同生活をする家であり、普通の住宅地にある。住宅のようであり住宅でない絶妙な距離感のデザインである。「Bring up みどり子ども発達センター」は、発達障害の子どもが通う施設で、発達障害児への細やかな配慮がデザインに結実している。「ROVEN OTAKIMACHI」は街道沿いの町家を宿泊できるレストランに改修するにあたり、設計者自身がいっしょに仕事をしている大工と現場に滞在し、地元の職人たちとともに施工する体制をつくっている。古民家改修に適したスキームである。

一般建築物の部

今回の応募作品から、コロナ禍を経て部分的にリモートワークを取り入れる働き方が定着し、住宅に求めるものに変化が伺えた。

最優秀賞の「さうさうのいえ」は、豊かな自然に近いことが魅力だが、かなりの斜面住宅地にあった。区画の三方を固める擁壁が老朽化し何らかの手当てが不可欠だった。平場をつくって家を建てる定石自体を考え直し、階段状の基礎が擁壁を兼ねるオルタナティブを実現させている。斜面地でこうした更新が連担していけば、住環境が格段に向上する可能性を示したところが大いに評価された。擁壁にかわって土間スペースができ、道との連続性をつくることにも成功している。

入賞の「都市の通庭」は、戸建て住宅には過酷な周辺環境の準住居地域にあって、アプローチのポケットパークを外に開き、内部の内路地と連続させている。「部分断熱の家」は、古民家を使い続けるときに求められる相入れない要素を取り入れてラディカルに改修し、古民家活用の幅を広げた事例といえる。

住宅の部